

# 平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > ダイジェスト版

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

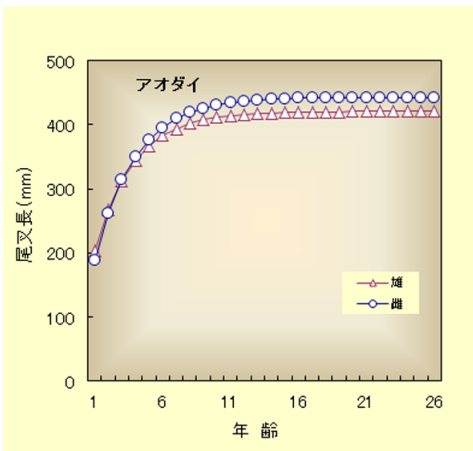
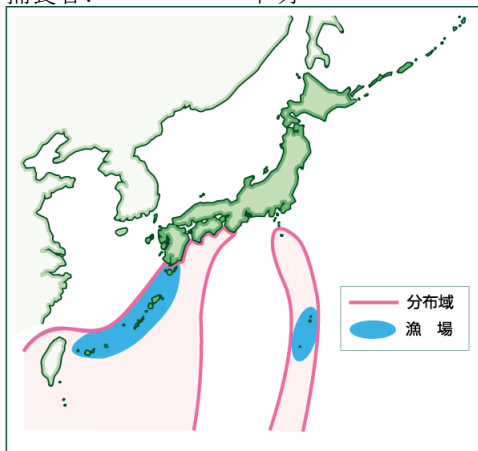
系群名(海域) (奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島)

担当水研 西海区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 不明  
成熟開始年齢: アオダイは2歳(30%)、6歳(100%)、ヒメダイは0歳(40%)、4歳(100%)、オオヒメは2歳(40%)、5歳(100%)、ハマダイは9歳(69%)、19歳以上(100%)  
産卵期・産卵場: アオダイは4～8月、ヒメダイ・オオヒメは5～7月(盛期)、ハマダイは4～11月  
索餌期・索餌場: 不明  
食性: アオダイは大型の動物性プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類やヒカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類  
捕食者: 不明

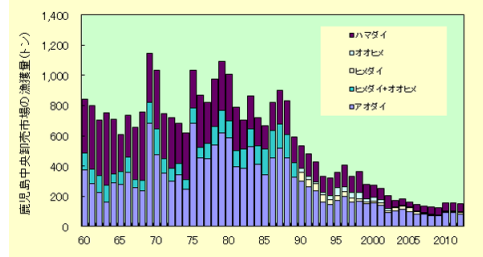


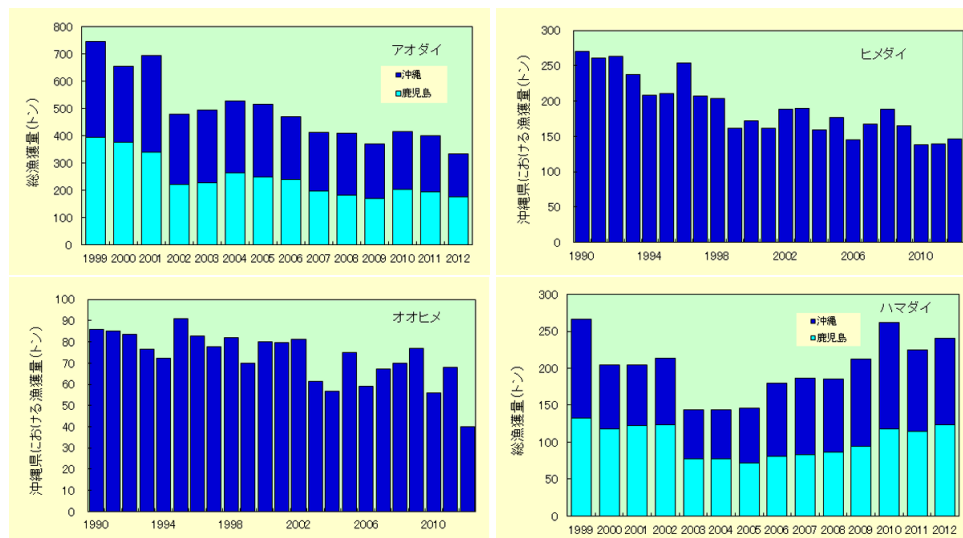
## 漁業の特徴

水深100m以深の深海一本釣による漁獲が多く、延縄でも漁獲される。周年操業する一本釣専門業者が多く、ソデイカ漁(漁期11～4月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰りまたは2～3日、5トン以上の船で1週間程度。

## 漁獲の動向

鹿児島中央卸売市場のマチ類4種合計の水揚げ量は、1988年まで800トン前後で増減しながらほぼ横ばい状態で推移したが、1989年以降急激な減少に転じ、2012年には151トンまで減少した。沖縄県でのマチ類全体の水揚げ量は、1980年に2,308トンの最高値を記録した後に急減し、1985年には最高時の約半分にまで落ち込んだ。1987年にかけて若干回復したが、その後2006年まで減少傾向が続いている。



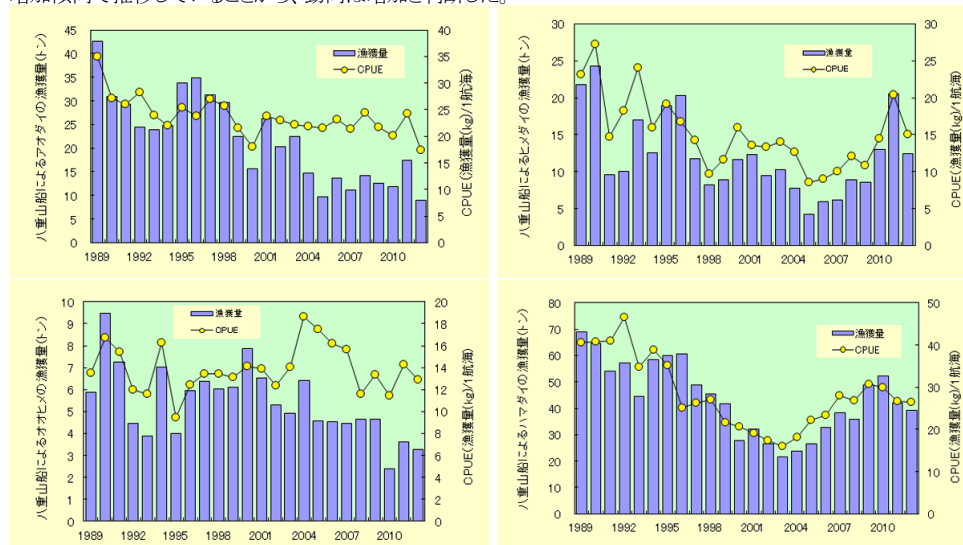


## 資源評価法

鹿児島県・沖縄県の主要港に水揚げされるマチ類の漁獲統計より、魚種別およびマチ類全体の漁獲量の経年変動の傾向を検討した。また沖縄県漁連に水揚げされる大型標本船13隻のマチ類および八重山漁協所属のマチ類全体の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去24年間の傾向を検討した。また各種の年齢別漁獲尾数を推定し、それらを用いてCPUEの相乗平均でチューニングしたコホート計算を試行し、資源の動向の参考とした。

## 資源状態

マチ類全体の漁獲量は過去50年の間に大幅に減少していることより、資源水準は低位とした。アオダイにおいては近年5年の漁獲量・CPUEの相乗平均、資源量の動向等がほぼ安定で推移していることより、動向は横ばいと判断した。ヒメダイは漁獲量はほぼ横ばいであるが、CPUEの相乗平均および資源量の推移は増加傾向を示していることより動向を増加と判断した。オオヒメは2012年の漁獲量・CPUEは若干減少気味であるが、近年5年の動向から横ばいと判断した。ハマダイは2011年に漁獲量およびCPUEが若干減少したが、近年5年は増加傾向であり、試算した資源量も近年増加傾向で推移していることから、動向は増加と判断した。



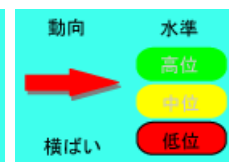
## アオダイ



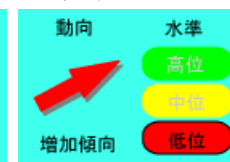
## ヒメダイ



## オオヒメ



## ハマダイ



## 管理方策

2010年から開始された第2期資源回復計画では第1期より保護区を拡大し、現在22区の周年または季節的な保護区を設置している。また、第2期から保護区に加え、漁獲サイズ規制も開始し、海域全体の若齢魚への漁獲圧を下げる方向で実施されている。さらに、沖縄県では県内漁業者に対して解禁された保護区への入域回数制限を実施している。今後これらの措置を当該海域を利用する全ての漁船にも適用することで、保護区が一定期間内の一時的な管理方策にならないような措置を講じていくことが検討されている。

## 資源評価のまとめ

- 鹿児島県中央卸売市場での2012年のマチ類の水揚げ量はピーク時のおよそ1/7まで減少していることより、マチ類全体の資源水準は低位
- 漁獲量、CPUEおよび資源量の推移から、マチ類4種それぞれの動向はアオダイおよびオオヒメは横ばい、ヒメダイおよびハマダイは増加

## 管理方策のまとめ

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 2010年4月より保護区を18区から22区に拡大した
- 保護区以外においても、漁獲圧を下げるため漁獲体長規制を実施している
- 解禁された保護区での漁獲制限が検討されている

執筆者：青沼佳方

資源評価は毎年更新されます。